

(2) 山王塚古墳と畿内の終末期古墳

—終末後期古墳論に関する素描—

広瀬和雄(国立歴史民俗博物館名誉教授)

上円下方墳という希有な墳形を採用した山王塚古墳。そこには版築工法や「基壇」の上部に横穴式石室を構築するという、既往の古墳にはなかった革新的な側面が目立つ。それは終末前期古墳とは違った、7世紀中頃以降の終末後期古墳のおおきな特性であって、畿内中枢と共通した装いともみなしうる。ここでは彼我の事例を比較しながら、終末後期の山王塚古墳を考えてみたい。それは同時に、「終末後期古墳論」のための素描でもある。

1 古墳の諸段階

前方後円墳が終息してからも古墳はつくられるが、それがあらかず関係性は大幅に変容している。9世紀までつづいた北東北の末期古墳を除くと、前方後円墳が造営された時代と、それが終息してからの終末期古墳にわけて考えたほうが、古墳という墳墓は理解しやすい。さらに、終末期古墳は7世紀中頃を境に、前期と後期で大きな差異をみせるので、つぎの3段階が設定できる。

第1段階。3世紀中頃から7世紀初め頃、古墳時代の前・中・後期である。北海道・北東北と沖縄を除く日本列島で前方後円墳が営造され、それを頂点として前方後方墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳などの多彩な墳形があいまって共通性と階層性をみせる。それは広域におよぶ中央—地方の政治秩序を体現した政治的墳墓なのだが、畿内中枢の政治勢力—大和川水系の有力首長層—が終始、その中核をになう。

第2段階。前方後円墳が終焉を迎えた7世紀初め頃以降、7世紀中頃にいたる終末前期である。しばらくの間は、前代の前方後円墳などとおなじ古墳群で、もしくは立地を違えて、円墳や方墳が築造される。前方後円墳を中軸とした古墳に政治秩序を媒介させる前代のシステムが、変容しながらも依然として維持されるようだが、その直接的な有効範囲は旧国ほどの範囲に狭まっている。7世紀代で最大の方墳は一辺80mの千葉県栄町岩屋古墳、おなじく円墳は直径82mの栃木県壬生町車塚古墳で、畿内地域ではないことがそのあたりの事情を物語っている。

第3段階。7世紀中頃から8世紀初め頃の終末後期である。これまでの円墳や方墳に加えて上円下方墳、上八角下方墳、八角墳のような新規の墳形のほか、版築工法や掘り込み地業、花崗岩切石や漆喰塗布、墳丘周囲の石敷きや格狭間といった仏教寺院関連の要素、さらには四神相応の思想や天円地方の観念などの中国イデオロギーがみられ、それ以前の古墳とは大幅に変質している。畿内、備後南部、多摩川上流域、白河などに偏在する傾向もみられる。

山王塚古墳が編年される終末後期古墳は、各地で一気に少なくなって、ごくかぎられた階層の造墓になってしまう。そして、それぞれが個性的な相貌をしめす。永年つづいてきた古墳という墓制の意味が大幅に変質したようだ。畿内では大和の飛鳥や南河内の磯長谷などが目につくが、山城や摂津や和泉ではほとんど見あたらない。

2 終末後期古墳の革新性

(1) 仏教的色彩

①花崗岩の切石

奈良県明日香村岩屋山古墳は一辺 55m、高さ 12m の方墳である。玄室の幅 2.7m、長さ 4.7m、高さ 2.6m、全長 16.7m の両袖式横穴式石室は、玄室の側壁・奥壁とも 2 段に花崗岩の切石を積む。きわめて高い硬度の花崗岩を小叩きして、あたかもナイフで切りとったかのように壁面を平滑に仕上げる。7 世紀中頃の築造である。こうした花崗岩切石技法を駆使した横穴式石室の構築は、奈良県橿原市小谷古墳、同桜井市文殊院西古墳、同平群町西宮古墳、同葛城市神明神社古墳、大阪府太子町叡福寺北（聖徳太子墓）古墳など、7 世紀中頃から末頃にかけての大和や河内地域の有力古墳にみられる特色である。

花崗岩の切石技法は、寺院堂塔の礎石や基壇化粧石などに用いられた技法で、6 世紀末頃を嚆矢とする寺院建築に際して導入されたのはいうまでもない。もっとも、横穴式石室の壁体を切石で整美に加工するのは、東国や出雲地域のほうが 6 世紀後半もしくは末頃からと早いが、それらは鉄ノミで削って整形できる凝灰岩や砂岩質の軟質な石材なので、硬質の花崗岩とは技術系譜が明白に異なるし、投下された労働量は比較にならない。

ここで注意しておきたいのは、4 世紀中頃から後半にかけて、京都府与謝野町蛭子山古墳の舟形石棺、同作山 1 号墳の組合せ式石棺、大阪府柏原市松岳山古墳の長持形石棺の蓋石と底石、京都府向日市妙見山古墳の組合せ式石棺、山梨県甲府市大丸山古墳の組合せ式石棺など、切石加工の花崗岩でつくられた石棺があることだ。ただ、そうした技術系譜は、その後は継承されずに、いったん途絶してしまう。

②漆喰の塗布

横穴式石室の壁面を切石で整美に仕上げるのに関連するのが、そこへの漆喰の塗布である。7 世紀中頃に築造された奈良県奈良市帯解黄金塚古墳は一辺 30m の方墳で、前室をそなえた全長約 16m の両袖式横穴式石室には、扁平な「榛原石」を積む。塼積みを模した玄室、前室、羨道の壁面は漆喰塗りで整美な白壁にする。大阪府高槻市・茨木市阿武山古墳は一辺 18.5m、高さ 0.2m に地山を削りだすだけで、明瞭な墳丘は認めがたい。幅 1.1m、長さ 2.7m、高さ 1.2m の無袖式横穴式石室には、夾紵棺が置かれた塼積の棺台を設えるが、石室の壁面のみならず棺台の平面や側面は全面漆喰が塗られる。推定 60 歳前後の男性人骨があって、ガラスと銀の針金で製作された玉枕や冠帽がみついている。墓道からの須恵器は 7 世紀中頃をしめす。同太子町二子塚古墳の横穴式石室は、自然石の表面に漆喰を塗る。

奈良県明日香村高松塚古墳や同キトラ古墳の切石づくりの横口式石槨には、漆喰塗りでいわば白壁となった四壁や天井に、四神や星宿や婦人像などの精緻な壁画を描く。こうした白壁づくりが、寺院堂塔の壁や築地塼などの模倣なのはまず動かない。

東国では一辺 54m、高さ 11m の方墳、7 世紀後半につくられた群馬県前橋市宝塔山古墳の横穴式石室の壁面が、漆喰を塗布した白壁づくりである。複室構造の両袖式横穴式石室は安山岩の切石切組づくりで、玄室幅 2.9m、長さ 3.3m、全長 12.4m である。

③版築工法

直径 20 ～ 25m の円墳、奈良県明日香村高松塚古墳の墳丘は 5 ～ 10cm ぐらいの厚さで、土を叩き締めながら水平に積みあげる版築工法で構築される。上円下方墳の奈良県奈良市石のカラト古墳や、八角墳の奈良県明日香村牽牛子古墳などの墳丘も版築工法で建設されるが、いずれも 7 世紀後半頃から末頃にかけて築造された終末後期古墳である。堰板で挟まれた土層を突き棒などで固く叩きしめるという土盛法は、寺院堂塔の基壇や築地塀などの敷き固めなどに用いられた技法なのもいうまでもない。

版築工法は墳丘だけではない。7 世紀末頃の東京都府中市熊野神社古墳では、最大幅 2.7m、玄室長 2.6m、全長約 8.8m で、凝灰質砂岩の切石を切組技法で積んだ横穴式石室の基礎工事として、掘り込み地業が設けられる。福島県白河市野地久保古墳の横穴式石槨などでは、その下部を一段掘り込んで、そこに版築で堅固な基礎をつくる。

そもそも掘り込み地業は、堂塔基壇の下部の地盤を掘りこんで、均質な土砂を版築工法で突き固めた硬い人工地盤で、瓦葺きで重量建築の堂塔が不同沈下しないように用いられた工法である。石舞台古墳や蛇塚古墳のような巨石墳ならともかく、いっそうの小型化がはじまった終末後期の横穴式石室の基礎工事には、さほど必要ではないように思われる。

④墳丘周囲の石敷き

奈良県奈良市帯解黄金塚古墳は一辺 30m で 2 段築成の方墳だが、段差をもった二段の石敷きを墳丘の外縁に沿わせてめぐらす。二列に縦積みした縁石で区画したなかに、平滑な自然石を水平に敷きつめた石敷きは、上段の幅が約 0.5m、下段の幅が約 1.6m で、7 世紀中頃の須恵器が出土している。奈良県明日香村牽牛子塚古墳は対辺約 22m の八角墳で、墳丘の周囲を切石と砂利を三重に敷いた石敷きが囲繞している。上円下方墳の石のカラト古墳でも、墳丘の周囲に礫を敷きつめる。

こうした墳丘の裾に沿ってめぐらされた石敷きは、寺院の堂塔をとりまく雨落ちとおなじ形状・構造を呈している。これもことさら指摘するまでもないことだが、土盛りでつくられた墳丘の周囲に、雨落ちが必要なはずがない。

それらとは様相を異にするが、横穴式石室のなかにも石敷きや塼敷きがみられる。奈良県香芝町平野塚穴山古墳の横穴式石槨の床面や、同平野 2 号墳の自然石積み横穴式石室の玄室床面には、それぞれ凝灰岩の切石が敷かれる。一辺 10m の方墳、大阪府茨木市初田 1 号墳の無袖式横穴式石室（幅 1.25m、長さ 2.9m）の床面には、固く焼かれた塼が敷きつめられる。大阪府河南町アカハゲ古墳では、横穴式石槨の前室に榛原石を敷く。

塼や凝灰岩切石は堂塔の床に敷かれたり、それらの基壇化粧などに使われるが、横穴式石室に敷かれた凝灰岩の切石や榛原石も、堂塔とおなじような感覚で用いられたのであろうか。もっとも、韓国扶余陵山里東古墳群の横穴式石室の床にも塼が敷かれるので、それとの関連も無視はできないが。

⑤漆棺

夾紵棺・漆塗木棺・漆塗籠棺・漆塗陶棺などの漆を用いた棺は、それまでの刳拔き式家形石棺と交替するかのようになり、7 世紀中頃から上位クラスの棺形態として製作される。漆棺のなかでも最上位なのは夾紵棺で、布と漆を何枚も交互に貼り合わせるその技法は、乾漆像などの応用とみてもいいのではないか。

漆喰塗りの埴積み棺台に置かれた阿武山古墳の夾紵棺は、幅 0.62m、長さ 1.97m、高さ 0.51m で、20 枚以上の布を漆で固めて棺をつくり、内面に朱漆、外面に黒漆を塗る。牽牛子古墳の横口式石槨にはふたつの棺台が造り出され、各々に麻布 30 枚を重ね、金銅製八花形座金具、金銅円形座金具、七宝亀甲形飾り金具を飾った夾紵棺が置かれる。ほかには奈良県明日香村野口王墓（天武・持統陵）古墳や大阪府太子町叡福寺北（聖徳太子墓）古墳など、ごく一部にかぎられた特別な棺である。

夾紵棺は装飾的な見せる棺で、家形石棺などと違って運ばれる棺である。内外に麻布を二枚重ね、その上に漆を重ね塗りした高松塚古墳の漆塗木棺も、六花形座金具や銅製座金具を飾る。ほかでは、直径 8m ほどの円墳の奈良県斑鳩町竜田御坊山 3 号墳では、花崗岩を加工した横口式石槨に、内外に漆を塗って漆棺に仕上げた須恵質の陶棺（幅 0.47m、長さ 1.57m）を納め、琥珀製枕や三彩有蓋円面硯が出土している。

東国では 7 世紀後半頃の埼玉県行田市八幡山古墳が唯一の事例である。ここでは夾紵棺のほかに漆塗木棺もあったようで、鉄釘接合木棺とあわせて 3 種類の棺が採用されたようだ。ちなみに、7 世紀後半頃の西宮古墳の刳拔式家形石棺は棺身しか遺っていないが、その上縁部の外側に受け部が造り出される。あたかも夾紵棺の蓋受けを模倣したかのようである。

⑥格狭間

大阪府羽曳野市御嶺山古墳（直径 30m ほどの円墳か）の内法長 2.22m、幅 1.45m、高さ 1.81m の横口式石槨には、長さ 1.98m、幅 1.29m、高さ 0.37m の凝灰岩製で朱彩された棺台が設けられる。そこに金銅製の錠前をつけた漆塗木棺が置かれるが、その各側面には格狭間が浮き彫りされている。7 世紀末頃の年代が付与される。

宝塔山古墳の白壁づくり横穴式石室の奥壁沿いに置かれた家形石棺は、身部の各側面がそのまま「脚部」として下方に伸ばされ、底面の下部がいわば中空になった特異な形式である。そのように造り出された「脚部」の各辺に、格狭間が切り込まれる。叡福寺北（聖徳太子墓）古墳の横穴式石室には、夾紵棺を置いた棺台が記録されているが、そこにも格狭間がほどこされていたようである。

7 世紀代の格狭間は、玉虫厨子の台座や仏像の台座など、仏像が安置される台を飾った紋様である。したがって、棺台や石棺に飾られた格狭間は、そこに埋葬された亡き首長の遺骸が、仏に擬せられたとの類推をもたらす。

(2) 中国思想

①天円地方の観念—上円下方墳

石のカラト古墳は一辺 13.8m、東辺での高さ約 2.91m、2 段につくられた上円下方墳である。1 段目の方台部の高さは 1.36m、2 段目の円形部の直径は 9.2m、高さは 1.55m で、それぞれ数工程におよぶ版築工法で盛土を積む。各段の斜面と平坦面には河原石を葺くが、墳丘の周囲にも礫敷きをほどこす。横口式石槨は内法で幅 1.03m、長さ 2.6m で、金銀製玉、銀装唐様大刀鞘の責金具などとともに漆断片が出土している。木心乾漆棺がおさめられていたようだ。7 世紀末～8 世紀初め頃である。福島県白河市野地久保古墳は一辺 16m の上円下方墳で、墳丘には河原石の葺石と敷石をほどこすが、周溝はない。上円部につくられた横口式石槨の基礎には掘り込み地業をほどこす。

畿内では上円下方墳は 1 基だが、それに先行して方台部に八角台が載った上八角下方墳が 2 基、確認されている。京都市御廟野（天智陵）古墳は、一辺 45m の方台部が上下 2 段につくられる。下

段石列の外側には幅数 m のテラスが四周し、その裾からの高さは 12m 前後である。上段部は載頭八角錐形で、斜面には河原石が散乱し、墳頂部は平坦で拳大の河原石があって、外縁の外側には花崗岩切石を平面八角形にめぐらす。奈良県桜井市段ノ塚（舒明陵）古墳は、3 段の方形壇に 2 段の八角台が載る。下段部の幅は約 90m で、その上段は東・南・西面がコ字形を呈し、貼石と外護列石をほどこす。八角台には地覆石の上部に、榛原石の板石がほぼ垂直に積まれる。

八角墳についても少しふれておく。野口王墓（天武・持統陵）古墳は対辺 38 ～ 45m の八角墳である。『阿不幾乃山陵記』によれば、墳丘は 5 段築成の八角形で周囲に石壇をめぐらす。長さ約 7.5m の横口式石槨に夾紵棺が安置され、合葬された持統天皇の火葬骨は金銅製容器に納められる。牽牛子塚古墳は対辺約 22m の八角墳で、墳丘の周囲には切石を使った石敷きが囲繞し、墳丘は版築工法で築成される。約 80 トンの凝灰岩（二上山）を削り抜いた横口式石槨のなかには 2 基の棺台が造り出され、七宝飾り金具で飾られた夾紵棺を置く。

上円下方墳は〈天円地方の観念〉を体現する。「円形は天でカミの空間、方形は地で人の場所」をあらわす。したがって、上円部に埋葬されていた亡き首長はカミに擬せられる、そう観念されていたのではないか。いっぽう、法隆寺夢殿や興福寺北円堂、あるいは京都府檜原廃寺の塔、さらには難波宮の八角建物や熊本県鞠智城など、八角形は 7 世紀後半前後の仏教寺院や難波宮などの堂塔などにみられる。

②四神相応の思想

帯解黄金塚古墳の石敷きをめぐらせた墳丘の北、東、西の三方に、東西約 120m、南北最大約 65m の範囲に、コの字状に墳丘を囲む周堤が造成される。南方は自然地形がそのまま下降していく。北に玄武、東に青龍、西に白虎に擬した人工盛土で三方を囲繞し、南は開放する。藤原宮や平城宮などの宮都につうじる〈四神相応の思想〉を具現したものであろう。

7 世紀中頃の大阪府羽曳野市塚穴（来目皇子墓）古墳は、一辺 53 ～ 54m、最大高が約 10m、凝灰岩ブロックの貼石をそなえた 3 段築成の方墳で、墳丘の四方を周堤が囲繞する。東・北・西側は自然地形を利用し、北側周堤の幅は約 39m、墳丘裾からの高さは 3.4m 程度にもおよぶ。ここでは南面にも人為的に造成された周堤がめぐる。その 2 段築成の上幅は 13m、南からの高さ 2.5m で、南端での盛土の厚さは 1.8m で、礫を充填した暗渠もみついている。切石づくりの両袖式横穴式石室をそなえる。

これら以降は人工の「周堤」ではなく、丘陵尾根などの自然地形で三方を取り囲んだり、古墳の北・東・西側の三方を大きく掘り込んだりして、四神相応に仕上げるのが目立つ。大がかりなものでは奈良県平群町西宮古墳や牽牛子塚古墳など、小規模なものでは奈良県上牧町上牧久渡 2 号墳などがある。

7 世紀後半の西宮古墳は一辺 35.6m、正面からの高さ 7.2m 以上で、下段は地山整形、上段は盛土で形成された 3 段築成の方墳で、墳丘斜面に板石、テラスには丸みのある礫石を貼石とする。玄室幅 1.95m、長さ 3.7m、高さ 2.1m、羨道幅 1.8m、長さ 10.1m の両袖式横穴式石室は、花崗岩切石の 1 段積みで、刳拔式家形石棺を置く。この墳丘をとりまく背後の丘陵は、南辺 120m、北辺 45m、奥行 70 ～ 80m の台形に削り込まれ、四神相応の思想をあらわす。ちなみに、北側の底部と丘陵頂部とは 12m 以上の比高をもつ。上牧町上牧久渡 2 号墳は全長約 9m の両袖式横穴式石室をそなえた直径 16m の円墳だが、丘陵尾根の南斜面で、北・東・西側の三方を大きく掘り込み、その南側に墳

丘がつくられる。北側の掘り込みの深さは約 7.5m で、その幅の斜距離は約 13m にもおよぶ。

畿内以外の事例も少しみておこう。7 世紀後半の滋賀県長浜市松尾宮山古墳は、一辺 17 × 13m の方墳とされるが、二重にめぐらされた外護列石は多角形を呈するので、多角形墳なのは動かない。丘陵南斜面の北・東・西側を掘り切って四神相応の地形に仕上げ、それらに囲まれて墳丘をつくる。南側は平地までつづく斜面をなす。自然石積みの無袖式横穴式石室（幅 1.4m、全長 8.5m）に、もはや突起がなくなった刳拔式家形石棺を置く。ほぼ同時期の島根県奥出雲町岩屋古墳は一辺約 15m の方墳（円墳）で、平滑な自然石を 1 段積みした全長約 7m の両袖式横穴式石室をもつ。谷の突き当たりの丘陵南斜面の尾根筋をやや下ったところで、おなじように四神相応の地形に改変する。

四神で墳丘を、ひいてはそこに埋葬された首長の遺骸を辟邪する。ちなみに、高松塚古墳やキトラ古墳の四神壁画もおなじような役割をもつ。漆喰で白壁に仕上げられた壁面と閉塞石に描かれた玄武、青龍、白虎、朱雀で、死した首長の遺骸や靈魂を守護すると観念されたわけだ。

（3）畿内終末後期古墳の特性

上述してきたように、畿内を中心とした終末後期古墳には、仏教寺院の諸要素と〈天円地方の観念〉ならびに〈四神相応の思想〉という中国思想が適用されている。

ひとつは寺院建立技術、ならびに堂塔を構成している諸施設の古墳への応用である。横穴式石室壁体の花崗岩切石技法や漆喰塗布、さらには墳丘構築に用いられた版築工法などは前者である。墳丘周囲にめぐらされた石敷きや、横穴式石室や横口式石槨の床面に設けられた埴敷きなどは後者である。漆棺や格狭間も、仏像やその台座に淵源を求めうるものである。

注意すべきは、これらが古墳造営にとって必須の条件とはいいいないことである。従来の盛土工法で十分なのに、版築工法を用いて墳丘を堅固に仕上げる必要性があるのかどうか。墓室を整美に仕上げる切石ならば軟らかい凝灰岩でも十分だが、ことさら硬い花崗岩をわざわざ綺麗に整形するのはどうしてか、といった疑念が湧き出る。

仏教寺院との密接不分離な営為は、けっして偶然ではなかろう。そこには明瞭な意志が発動されたとみたほうが理解しやすい。石敷きの雨落ちをめぐる墳丘は堂塔（仏を祀る場）に見立てられ、花崗岩切石、埴敷き、版築、漆喰などは、堂塔に似せるための工事とみてはどうか。格狭間は仏像の台座とつよくかわるから、漆棺や石棺におさめられた首長の遺骸は仏に擬せられたのではないか。この頃の仏は「蕃神」（となりのくにのかみ・あだしのくにのかみ）だから、亡き首長はカミと観念されたのであろう。そうだとすれば、古墳時代前期以来のカミ観念が、深層では変貌しながらもつづいていて、それが外来の思想をまとして、7 世紀中頃になって一気に顕在化したことになる。

いまひとつは、四神相応の立地や天円地方の観念などの中国思想の採用だが、そこからはカミに昇華させた首長を辟邪するという観念が読みとれる。畿内を中心とした前・中期の巨大・大型前方後円墳の後円部墳頂には、天円地方の観念を体現した「内方外円区画」が設けられるが、それとのいわば〈不連続の連続〉とでもいうべきイデオロギーが、古墳時代の首長層には潜在しながらつづいていたようだ。

〈亡き首長がカミと化して共同体を守護し、その繁栄をもたらす〉という共同観念が、3 世紀中頃以降の前方後円墳の本質である。そうした共同幻想は変容しながらも終末後期までつづいていた。もっともこの時期になると、〈カミと化す〉のはごく一部の有力首長（貴族）に限られてしまうが。

3 武蔵の終末後期古墳と東山道武蔵路

(1) 山王塚古墳と畿内終末後期古墳

①山王塚古墳の特性

本稿の対象となった山王塚古墳をはじめ、東京都三鷹市天文台構内古墳、熊野神社古墳、石のカラト古墳、静岡県沼津市清水柳北1号墳、野地久保古墳と、わずか6例しか確認されていない上円下方墳という希少な墳形のなかで、山王塚古墳は一辺63m、高さ5mと最大規模である。まずは、天円地方の観念という中国思想にもとづく墳形の採用が、山王塚古墳の第一の特性である。

前述したように、円は天でカミの住まいする空間、方は地で人の空間とみるのが天円地方の観念だが、カミの空間とみなされた上円部には横穴式石室がつくられる。そこに埋葬された亡き首長の遺骸と靈魂が、カミと観念されたのであろうか。

注意をひくのは、上円下方という墳形が畿内では石のカラト古墳ぐらいしかない、という事実である。上段が八角形で下段が方形の京都市御廟野（天智陵）古墳や奈良県桜井市段ノ塚（舒明陵）古墳をふくめても、いまのところ3例しか見あたらない。それらを除くと武蔵北部の山王塚古墳、武蔵南部の天文台構内古墳ならびに熊野神社古墳と、上円下方墳の3／6基が武蔵地域という高い頻度になる。この特異な墳形の採用が、中央経由であったのか、武蔵有力首長層の裁量であったのか、十分に吟味されねばならないが、この数字の意味は大きい。

第二の特性は墳丘や外域施設の構造にある。山王塚古墳には葺石や貼石の外表施設はないが、石室の延長部の箇所は掘り残して土橋にした、最大幅19mの周濠をめぐらす。その周囲には平地がひろがる。したがって、畿内の牽牛子塚古墳や帯解黄金塚古墳のように、墳丘周囲に石敷きをめぐらすわけではないし、北、東、西の三方を自然の丘陵尾根や人工の高まりで画するという、四神相応の思想も認めがたい。

なによりも、一辺69mと大きさへの指向性がつよい。その観点から興味深いのは、1段目の方台部の四周縁辺だけ、それ以外の平坦部より高く土手状に盛土を積み上げることである。墳丘を遠方から見れば低い平坦部は見えずに、高い縁辺部が1段目全体の高さとして映ずるから、少ない盛土（労働量）で大きな効果を生み出す装置といえる。浅い周濠とあいまって墳丘をいっそう大きく見せる工夫と評価できそうだ。小型化が著しい終末後期でのこうした造作は、いわば時代への逆行ともいえる現象に映ずる。もっとも、おなじ北武蔵で山王塚古墳とほぼ同時期の行田市八幡山古墳の墳丘は直径80mと、終末後期としてはきわめて大型である。畿内では岩屋山古墳が一辺55m、塚穴（来目皇子墓）古墳が一辺53～54mと大きくて、それらにつづく時期の野口王墓（天武陵）古墳は対辺38～45m、さらに後出の高松塚古墳は直径20～25mにすぎない。南武蔵でも同様に、天文台構内古墳は一辺31m、熊野神社古墳は一辺32mと小型化している。

第三の特性は、横穴式石室にある。いまのところ、横穴式石室の羨道と前庭部の一部が調査されただけなので、詳しくはこれからの課題である。したがって、角閃石安山岩を加工した切石を積んだ羨道側壁はまっすぐで床は礫敷き、前門には緑泥片岩の板石を立て、その基礎には角閃石安山岩を敷く、といった以外の平面プランや構造などは不明である。また、鉄釘が出土しているので、鉄釘接合木棺があったらしいが、漆棺があったかどうかはわからない。

重要なのは、横穴式石室の下部構造についての事実である。石室の構築に際して、まず表土が除

去される。ついで、均質なロームを厚さ 1.3m ほど、版築状に丁寧に積み上げる。いわば「基壇」をつかって、その上部に石室を構築する。まさしく古代寺院の堂塔と同等の扱いを、山王塚古墳の横穴式石室は目指す。東国の終末後期古墳に目につく掘り込み地業は、ここでは採用されない。

第四の特性は、墳丘築成への版築工法の適用である。あたかも横穴式石室をパックするかのように、黄赤色のハードロームが版築状工法で分厚く積まれる。留意したいのは、そのひとつの供給先が周濠ということである。おそらく、ハードローム層を掘削したのであろう、周濠の底部が各所で深く掘くばめられ、その後、埋め戻されて底部の凹凸が平坦にされる。どれくらいの比率かはわからないが、近場でまかなったのは確実なようだ。ちなみに、周濠の立ち上がりは緩やかで、墳丘との屈曲点はさほど明瞭ではない。

②山王塚古墳と畿内終末後期古墳の異同

前項までの検討で、山王塚古墳と畿内の終末後期古墳の共通性と差異性が明らかになってきた。つぎに整理しておこう。

第一、墳丘を築成した版築工法は、畿内では高松塚古墳やキトラ古墳などにみられるが、東国では山王塚古墳のほかに熊野神社古墳などでも確認される。寺院造営技法で終末後期古墳が築造されたのである。もっとも花崗岩の切石、漆喰塗布、墳丘周囲の石敷、漆棺、格狭間などは山王塚古墳にはみられない。

第二、天文台構内古墳、熊野神社古墳、神奈川県川崎市馬絹古墳、埼玉県小川町穴八幡古墳、八幡山古墳、野地久保古墳などの横穴式石室には、その構築に先立って版築工法による掘り込み地業が設けられるが、山王塚古墳では版築状工法で「基壇」が築かれる（八幡山古墳もその可能性がある）。重量が軽減化された終末後期の横穴式石室や横口式石槨の基礎を、それほどまでに固く叩き締める必然性は奈辺にあるのか。

ちなみに、上記した掘り込み地業も山王塚古墳の「基壇」も、ふたつとも堂塔の基礎工事なので、その上部につくられた横穴式石室は、堂塔に擬せられたともみなしうる。ちなみに、現状では畿内でのこうした事例は見あたらない。

第三、上述したように、天円地方の観念を表象した上円下方墳は武蔵地域では 3 例と多いが、畿内では 1 例にすぎない。そして、その採用年代も武蔵のほうがやや早いので、どちらかといえば武蔵有力首長層の主導性が発揮された可能性も否めない。ただ、四神相応の思想はみられない。

第四、下方部の周縁盛土に象徴される墳丘の大型指向や、角閃石安山岩、緑泥片岩、河原石など複数の石材を使い分けた、そしておそらく胴張りで切石づくりで複室構造と推測される、武蔵地域の伝統的な横穴式石室は、畿内とは重ならない特性である。畿内中枢ではこの時期、主流となる墓室は横穴式石室から横口式石槨へと軸足を移動させている。

山王塚古墳の破壊された横穴式石室の一画からは、7 世紀後半頃の須恵器平瓶やフラスコ形長頸壺 3 個体などが出土している。須恵器長頸壺の供献は、天文台構内古墳や東京都大田区多摩川台 8 号墳などにもあって、武蔵地域での共通した葬送儀礼の一端をしめすかのようだ。

このようにみてくると、仏教寺院的技法や古代中国思想の採用という、畿内中枢との共通した相貌と、横穴式石室にみられる武蔵地域の伝統的側面との結びつきが、山王塚古墳を構成していることがわかる。山王塚古墳は畿内中枢とのつよいつながりを秘めながらも、在地の意志も表現した墓制と

みることができそうだ。

(2) 山王塚古墳と東山道武蔵路

①南武蔵の終末後期古墳

各地の終末後期古墳には単独墳が目立つ。首長墓が累代的につづいて古墳群を形成することはあまりない。そして、武蔵南部などのように既往の有力古墳がなかった地点に築造されたりする。前方後円墳のように広域の政治秩序を媒介するというより、畿内中枢と結びついた有力首長の顕彰碑といった意味合いが強い。ちなみに、山王塚古墳には山王塚西古墳が西接するが、その間には一、二代ほどの時期的空白がありそうだ。

前述したように、山王塚古墳とおなじ上円下方墳は、武蔵南部の多摩川中流域左岸に、天文台構内古墳と熊野神社古墳の2基が築造される。版築工法で造成された天文台構内古墳の墳丘に葺石はなく、石室の前面を掘り残した幅約8mの周溝をめぐるすのは、山王塚古墳と似ている。シルト質砂岩を積んだ切石切組づくり胴張り複室構造の両袖式横穴式石室は、深さ70cmの掘り込み地業をとまう。7世紀後半頃の北武蔵産の土師器杯と湖西窯産の須恵器長頸瓶が出ているので、山王塚古墳とおなじ頃の年代が得られる。

それについて造営された熊野神社古墳も、版築工法だが川原石の葺石をほどこす。凝灰質砂岩を用いた横穴式石室の形式や、掘り込み地業を基礎工事とするのも、天文台構内古墳とおなじである。水晶玉や七曜文を刻んだ鉄地銀象嵌鞘尻金具などが出土していて、石室の平面形から7世紀末頃の年代が付与される。

重要なのは、これら2基に先行する有力な古墳が、近辺には存在しない事実である。いってみれば有力首長墓の空白地帯に、終末後期になって突然、切石切組で胴張り複室構造の両袖式の横穴式石室という北武蔵で盛行した墓室を襲う上円下方墳が、2代にわたって造営されたことになる。

おなじ多摩川中流の右岸域にも、それらと同形式の横穴式石室をもつ終末後期古墳が3基、2～3代におよんで営造される。東京都多摩市稲荷塚古墳、同白井塚古墳、東京都八王子市北大谷古墳がそうだが、稲荷塚古墳は天皇陵古墳などに顕著な八角墳だし、北大谷古墳もおそらく多角形墳なので、左岸域の2基とは異なる墳形を採用している。そして、ここでも先行する有力古墳は近辺には見あたらない。

②東山道武蔵路と武蔵の終末後期古墳

7世紀後半から末頃にかけて、多摩川中流の左・右岸域に、北武蔵から二人前後の有力首長が移住した。いかなる目的でそうした事態が起こったのか。南武蔵に突如として出現した有力首長墓の立地にひとつのヒントがある。すなわち、武蔵特有の横穴式石室をそなえた5基の終末後期古墳は、東山道武蔵路が多摩川と交差する渡河地点からそう遠くは離れてはいない。

各地につくられた〈見せる墳墓〉としての前方後円墳をみるかぎり、古墳時代の交通は河川交通や海上交通の水運が主流だった。南武蔵でも宝来山古墳や亀甲山古墳など、多摩川下流域に築造された前期前方後円墳からすると、多摩川船運が人と「もの」の往来の中軸を占めていたのは推測に難くない。それと新規に建設された東山道武蔵路との交差点近く、いいかえれば陸運と水運との結節点、新旧の交通ネットワークの拠点の近辺に、7世紀後半から末にかけて5基の終末後期古墳が造営される。いっぽう、北武蔵の山王塚古墳も、東山道武蔵路と入間川を視野におさめた段丘縁辺に立地して

いる。

東山道武蔵路の建設は7世紀後半頃とみられている。これら北・南武蔵の有力首長墓はそれとほぼ同時期に建造されるから、東山道武蔵路の建設や管理運営と密接に関与したとの蓋然性は、決して低くはない。繰り返すならば、多摩川や入間川の船運とそれを横断する広域陸路の東山道武蔵道、水運と陸運を統一した新しい交通体系が7世紀後半に創設され、北武蔵の有力首長層がそれを推進した。そのなかの二人ほどの有力首長が多摩川中流域に移住し、やがてはその拠点に武蔵国府を設置する。

ここで留意しておきたいのが、北武蔵の八幡山古墳である。7世紀中頃から後半にかけての造営にもかかわらず、直径80mとすこぶる大型円墳なのは前記したが、推定全長16.7mと横穴式石室も巨大である。それは前室を2室ともなう胴張り複室構造の横穴式石室で、緑泥片岩・角閃石安山岩・輝石安山岩・凝灰質砂岩と、多種類の切石を積む。石室下部は掘り込み地業（基壇の可能性も）がほどこされ、夾紵棺を筆頭に、鍍金銅鉾で留めた黒漆塗り木棺、鉄釘接合木棺と3種類の棺があって、おそらく夾紵棺に金銅八花形座金具が飾られる。さらに金銅製大刀、鉄刀、銅椀、鉄鏃、須恵器フラスコ瓶も出土している。

上円下方墳の山王塚古墳、天文台構内古墳、熊野神社古墳、八角墳の稲荷塚古墳、多角形墳の北大谷古墳、墳形不明の白井塚古墳など、同形式の横穴式石室を共有した有力首長層の頂点に、この八幡山古墳の被葬者が聳立していたのは動かないようだ。もっとも、円墳らしいという事実がやや違和感を覚えるが、革新性と伝統性との組み合わせも、武蔵の終末後期古墳を通底する現象である。

それはともかく、上野地域と相模地域を結ぶ東山道武蔵路は、当然のことながら武蔵地域のなかだけでは完結しない。そうであれば、その建設に際して主導性を発揮したであろう北武蔵の有力首長層が、自律的な意志だけでそれを遂行したのでないことはたやすく理解される。広域道路網の整備という中央政権の政治意志にもとづくのは疑いないだろう。すなわち、中央と地方の「もの」・人の安定的な往来が7世紀後半につよく要請されたことが、そうした動向の背景をなすのだが、それはなにかとの問いが出てくる。

山王塚古墳を造営した有力首長は、東山道武蔵路という交通の要衝を管掌する、という重要な政治的役割をになった。その顕彰碑的な役割をはたしたのが、革新的と伝統的のふたつの要因を重ねさせた終末後期古墳なのである。

付記

小稿をなすにあたっては、猪熊兼勝・大脇潔・津村広志編『飛鳥時代の古墳』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館・1981年）や森浩一編『終末期古墳』（塙書房・1973年）をはじめ、数多くの論文や報告書を参照した。ただ、あつかった項目や古墳が多岐におよび、そしてテーマについての素描という性格もあって、省略せざるを得なかった。ご寛容をお願いする次第である。また「3 武蔵の終末後期古墳と東山道武蔵路」は、拙稿「多摩川流域の後・終末期古墳—7世紀における東国地域の一動態—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第170集（2012年）の後編でもある。なお、今回の関連遺跡の踏査などについて、東国終末期古墳は池上悟、岡田賢治、東山道武蔵路は松原典明、増井有真、塚穴（来目皇子墓）古墳は高野学ら、各氏のお世話になった。記して感謝の意を表する。